
時間屋さん

かやしまみづき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時間屋さん

【Nコード】
N8897H

【作者名】
かやしまみづき

【あらすじ】
OLの結城が仕事帰りに見つけたのは、少年が時間を売る不思議な店だった。

第一話 残業

「結城さん、悪いけどこれ明日までにやっておいでくれる？」

「あ、はい……」

定時2時間42分過ぎ。また新しい仕事が増えた。

今日も家に帰れるのは日付が変わってからだろう。入社してからこんな日がずっと続いている。おかげで毎日体のどこかしらが痛い。本当は経理なんかじゃなくて翻訳の仕事がしたかった。なのに、内定をもらえたのは翻訳なんか全然関係ないこの会社だけだった。

私の大学4年間って一体何だったんだろう。

かといってこの不況じゃ転職する勇氣も出ない。

日付が変わる2分前、やっと仕事が一段落した。

今日はもう切り上げて帰ろうと着替えていたら、左腕にしていた腕時計がなくなっている事に気付く。

やだな、どこで落としちゃったんだろ。

その日思いがけないミスをして落ち込んでいた私は、探す氣力もなくそのまま会社を出てきてしまった。

深夜のビル街はひっそりとたたずんでいて、無意味に変色する信号の光だけが、雨上がりの濡れたコンクリートを毒毒しく照らしていた。

第二話 少年

「あれ」

タクシーを拾おうと駅のロータリーに出ると、道路を挟んだ向かい側の道に、ビル街に似つかわしくないメルヘンな建物が建っていた。可愛い。新しいカフェが何かな。

ドアノブには『OPEN』の札がぶら下がっている。

何のお店か気になった私は道路を渡って近付いてみた。

「卯月時間店……」

店先に吊り下げられている看板にはそう書かれていた。

その下には不思議の国のアリスに出てくる時計うさぎの置物が置かれている。

こんな時間に営業中？

いつもの癖で腕時計を見ようと肘を曲げたところで、腕時計がない事を思い出した。一瞬考えて、その手で鞆の中から携帯電話を取り出す。

日付はとつくに変わっていて、あと数時間後にはまた仕事が始まる。

すごく疲れてるけど、せっかくだから新しい腕時計でも買って行こうかな。

いつもだったら次の機会に回すけど、何故か今日だけは見ていく気分になった。

「いらっしやいませ」

奥から店員さんの声がしたけど、姿は見えない。

店内には無数の秒針が動く音がやけに響いていた。

その割に、ガラスでできたショーケースの中に時計はひとつもなかった。やっぱりもう店じまい？ でもいらっしやいませって聞こえたし……。

考えていると店員さんがレジカウンターの後ろにある扉から出て

きた。

自分の目を疑った。明らかに成人していない少年だった。中学生？ 小学生！？

日本でこんな小さな子どもが夜中に働いていいわけがない。

ああでも、この子はしょうがないのかもしれない。

だってその店員さんは、髪と肌が真っ白で、目は真っ赤だったから。

第三話 色素

色素欠乏症、だったっけ。

色素が極端に少ないから日光に弱くて、昼間は外に出られない。きつと夜中に家族でやってるお店の手伝いをしているんだ。

うさを彷彿とさせるその容姿を、とても綺麗だと思った。

「あの、腕時計を見たいのですが」

「申し訳ございません。腕時計は取り扱っておりません」

「あ、そうですか」

時計屋のくせに。

「じゃあ置き時計を……」

別に置き時計が欲しかった訳じゃないけれど、お店に入った手前すぐ帰るのも何となく気まずくて。

「置き時計も取り扱っておりません」

「はあ、そうですか」

何、この店。

馬鹿らしくなって私はお店を出る事にした。

ドアに手をかけようとした時、背中越しに声をかけられる。

「時を売っています」

店員を振り返って3秒程考える。

「と、時計？」

「時間です」

「……」

相手と話が噛み合わない人間は不安を覚えるらしい。

不思議の国に迷い込んだアリスはきつとすごいストレスを感じたんじゃないかしら。

「つまり時間を増やす、という事です。例えば1日のうち1時間でも睡眠時間が増えたら良いと思いませんか？」

「まあ、それはそうですけど……」

「試してみます？ 無料で明日を1時間増やして差し上げますよ」
怪しい。胡散臭い。催眠商法が何かなんじやなかるうか。

でも、確かに時間が増えるのは嬉しい。

「本当に無料なんですね？」

「無料です」

「……じゃあ、試してみます」

「かしこまりました。少々お待ちください」

そう言う少年は古びた紙を取り出してペンで何かを書きつけた。
個人情報でも聞かれるのかと身構えたけど何も言われなかった。

「それでは、お客様の明日を1時間増やしました。もしお気に召されましたらまたいらしてくださいね」

「ああ、はい」

まあ、いいか。どうせ子どものいたずらだろうし。

「それではお待ちしております、結城さま」

「え？ 何で名前を？」

「やだなあ、一番最初に名乗ってくれたじゃないですか」

「あれ、そう……そうでした、ね……？」

駄目だ。眠すぎてもう頭が働かない。早く帰る。

今の出来事だって、もしかしたら夢オチかもしれない。

第四話 購入

次の日、特に何も変わった事は起こらなかった。普通に仕事に追われて、普通に残業して、普通に疲れて、普通に帰宅。

少しがっかりしてる自分に気付いて苦笑した。そうだね、まさか本当に増えるわけじゃないじゃない。

何気なく壁にかけてある時計を見る。私は思わず声をあげていた。

「ああ、増えてる」

数字が13まであった。

見間違えたのかと思って、一度視線を外してからもう一度見る。

やっぱり13まである。

目覚まし時計を確認してみると、これも13まであった。

朝、部屋を出る時は確かに12までだった。まさか本当に時間が増えたっていうの？

「すごい……」

現代文明は私が思っていたよりもずっと発達していたみたい。

数字が13まであったら、1時間は65分になっちゃうけどそこらへんどうなんだろう。そんな事を考えていたらいつの間にか眠ってしまっていた。

目覚ましが鳴っている。

布団の中から手を伸ばしスイッチをオフにして、文字盤を確認する。数字は12までに戻っていた。

カーテンを開けてのびをしてみる。朝日が気持ち良い。

1時間増えるだけでも随分違うな。

妙に爽やかな気分では会社へと向かった。

「いらっしやいませ。お待ちしております、結城さま」

仕事が終わってから卯月時間店に行くと、少年がカウンターの影からぴよこんと出てきた。口調は大人びているけど、仕草は子どもらしいんだな。微笑ましくなって少し笑った。

「1時間増えて如何でしたか？」

「すごく助かった」

「それは良かったです」

少年はにっこりと微笑んだ。

「また時間買いたいんだけど、どれくらいするの？」

「そうですね、オプションを付けたりするとまた違ってきますけど、基本はこれぐらいです」

少年が差し出してきたカタログに書かれた値段は、ゼロが後ろにいつぱいくっつついていた。

「け、結構するね」

「ええ、何せ供給が少ない商品ですから」

少年が苦笑して答えた。時間市場も色々あるみたい。

「そっか、じゃあ明日を3時間増やして欲しいな」

「かしこまりました」

今までお金を使う暇なんかなかったから、そこそこの貯金があったのだ。

睡眠時間を増やしたり、休日を増やして溜まっていた家事をした。海外旅行を楽しんだりもした。

久しぶりにゆつくりできて、心が潤うるっていくのを感じた。とても穏やかな気分。

「結城さん、最近変わりましたよね。彼氏でもできたんですかあ？」

いつもは鼻につく後輩の喋り方も、今は何も思わない。改めて、いかに自分に余裕がなかったのか思い知らされた。

でも、これからはもう大丈夫。そう、私は変わったんだ。

第五話 変化

それから暫くした朝の事。

「やだ、肌ガサガサ」

沢山眠ったにも関わらず、私の肌は酷くやつれていた。

鏡でよく見てみると、目元にはくつきりと深いシワが刻まれている事に気付く。

「うそっ、昨日まではなかったのに」

突然の変化に戸惑いながらも、きっと旅行帰りで疲れているだけだと、一過性のものだと思っていた。

「また睡眠時間を少し買っておかなきゃ」

それからというもの、私は多めに睡眠時間を買うようになった。

貯金はどんどん減っていったけど、そんな事気にしていられなかった。

「ただ、私の体はどんどん老いていった。」

白髪が生えてくる様になり、腰や関節は痛くなって、肌はかさかさになった。

色々な化粧品を試してみてもあまり効果が感じられない。どうして？

また前みたいに余裕のない自分に帰っていく気がした。

違う、私は前とは変わったの！だから、急がなきゃ。

急がなきゃ、体が老いてゆく。

急がなきゃ急がなきゃ急がなきゃ急がなきゃ急がなきゃ
急がなきゃ急がなきゃ急がなきゃ急がなきゃ急がなきゃ
急がなきゃ急がなきゃ急がなきゃ急がなきゃ急がなきゃ
急がなきゃ急がなきゃ急がなきゃ急がなきゃ急がなきゃ

これも老化の弊害なんだろうか。

昼食を買い忘れていた事に気付いた。しょうがなく会社の近くのカフェで軽食をテイクアウトしようと、外に出る。

お昼時のカフェは、若い人が多くてなんだか気後れする。

いやいや、私だってまだ20代だ。

自分を奮い立たせてみたけど、やっぱり居心地が悪かった。注文が済むと私はそくさと店内から立ち去った。

あまりに慌てていたから、入り口に人が居る事なんて気付かなかった。

案の定避けきれなくて、思いつきりその人にぶつかる。30代ぐらいのスーツを着た男性だった。

「ごめんごめん、大丈夫？ おばあちゃん」

おばあちゃん。初めてそう言われて愕然とした。

「だ……大丈夫……」

もう誰も私が20代だなんて気付かない。身体が重い。心が重いよ。

第六話 返品

——もしかして。

ここまできてやっと気付いた。

他の人より余計に生きてるからだ。

肌の調子が悪くなり始めたのも、時間を買う様になってから。急いで会社に戻ると、すぐさま課長の席へ向かった。

「すみません、体調が優れないので早退させてください」

「ああ、そうした方がいい。お大事に」

意外にもすんなり許可が下りた。

仕事のスケジュールはかなりギリギリだったけれど、誰にも何も言われなかった。それほど私の顔は青ざめていたのだろう。

早く、あのお店に行かなきゃ。

痛む関節をかばいながらなるべく早く歩こうとする。

ゆっくりとしか動けないのがもどかしい。気持ちだけが焦って体から飛んでつちやいそう。

やっとの事でお店に着くと、すぐさま少年に訴えた。

「お願い、時間を戻して……」

「時間の返品ですね？ 手数料がかかってしまいましたが、宜しいでしょうか？」

時間の、返品。そういう扱いなのか。

「はい、構いません」

時間を買うのと同じく、莫大なお金を取られるのかもしれない。それでもいい。とにかく私は戻ろうと必死だった。

「確かに承りました。明日の朝には戻っています」

心底ほっとした。

これで、戻る。

戻ったら仕事を辞めよう。だって若い体に戻るんだもの。そうしたら何だって出来る。

『仕事が忙しい』なんて所詮は言い訳だったんだ。ちゃんと今を生きたいと。

「それでは、手数料としてお客様の記憶をいただきました。ありがとうございます」

記憶？ どういう事だろう。

朦朧とした意識の中でなんとか考えようとしたけど、結局その努力を放棄して私は家へと帰る事にした。

今は一刻も早く帰って身体を休めたい。

だから私がお店を出た後、窓ガラスごしに少年が誰かに電話をかけているのが見えても何も思わなかった。

「もしもし、卯月です。今回の依頼が終了しました為ご報告させていただきます。ええ、結城さまです。これで245回目です。最初？ ええとこの方は……大正12年に初めてご来店なさっています。はい、よろしくお願いいたします」

最終話 無限

「結城さん、悪いけどこれ明日までにやっておいでくれる？」

「あ、はい……」

定時2時間42分過ぎ。また新しい仕事が増えた。

今日も家に帰れるのは日付が変わってからだろう。入社してからこんな日がずっと続いている。おかげで毎日体のどこかしらが痛い。本当は経理なんかじゃなくて翻訳の仕事がしたかった。なのに、内定をもらえたのは翻訳なんか全然関係ないこの会社だけだった。

私の大学4年間って一体何だったんだろう。

かといってこの不況じゃ転職する勇気も出ない。

日付が変わる2分前、やっと仕事が一段落した。

今日はもう切り上げて帰ろうと着替えていたら、左腕にしていた腕時計がなくなっている事に気付く。

やだな、どこで落としちゃったんだろ。

「あれ」

タクシーを拾おうと駅のロータリーに出ると、道路を挟んだ向かい側の道に、ビル街に似つかわしくないメルヘンな建物が建っていた。可愛い。新しいカフェか何かかな。

ドアノブには『OPEN』の札がぶら下がっている。

何のお店か気になった私は道路を渡って近付いてみた。

「卯月時間店……」

店先に吊り下げられている看板にはそう書かれていた。

その下には不思議の国のアリスに出てくる時計うさぎの置物が置かれている。

こんな時間に営業中？

いつもの癖で腕時計を見ようと肘を曲げたところで、腕時計がない事を思い出した。一瞬考えて、その手で鞆の中から携帯電話を取

り出す。

日付はとつくになつていて、あと数時間後にはまた仕事が始まる。

すごく疲れてるけど、せっかくだから新しい腕時計でも買つて行こうかな。

いつもだったら次の機会に回すけど、何故か今日だけは見ていく気分になつた。

「いらっしやませ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8897h/>

時間屋さん

2010年10月19日01時46分発行